

病害虫発生予報 第5号(8月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稻	いもち病 紋枯病 縞葉枯病 ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ イチモンジセセリ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	少 並 並 並 並 やや少 やや多 並 並 並		ミナミキイロアザミウマ ミカンキイロアザミウマ ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	並 並 並 やや多
			カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ ゴマダラカミキリ	やや少 やや多 少 並 やや少 並
			カキ	炭疽病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 並 やや少 やや少 やや少 やや少
トマト・ミニトマト	疫病 黄化葉巻病	やや少 並	果樹全般	カメムシ類	やや少
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類	やや多 並			

気象予報

1か月予報（予報期間 7月27日～8月26日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

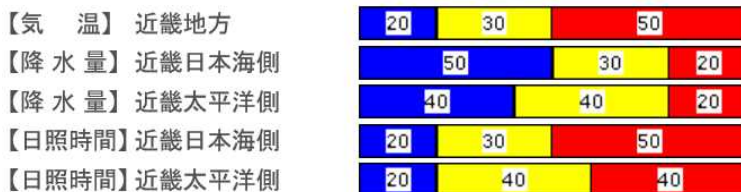
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、近畿日本海側で少ない確率50%、近畿太平洋側で平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、近畿日本海側で多い確率50%、近畿太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温 (平年値) (°C)	月降水量 (平年値) (mm)
8月	和歌山 28.1	和歌山 86.0
	潮岬 27.0	潮岬 233.2

I. 水 稲

1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の葉いもちの発生ほ場率は0%（平成32%）、発病株率は0%（平成6.6%）であった。
- ② 県北部および中部の普通期栽培における7月上～中旬の葉いもちの発生ほ場率は0%（平成22%）、発病株率は0%（平成3.6%）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期に追加防除を行う。
- ② 常発地では翌年から罹病性品種の作付けを避ける。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成2%）、発病株率は0%（平成0.1%）であった。
- ② 県北部および中部の普通期栽培における7月上～中旬の発生ほ場率は0%（平成2%）、発病株率は0%（平成0.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に発病株率が20%以上のほ場では、早急に薬剤防除を行う。
- ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加防除を行う。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における7月中旬の発生ほ場率は0%（平成2%）、発病株率は0%（平成0.1%）であった。
- ② 県北部および中部の普通期栽培における7月上～中旬の発生ほ場率は0%（平成4%）、発病株率は0%（平成0.1%）であった。
- ③ 媒介虫であるヒメトビウンカの8月の発生量は並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 縞葉枯病の発生が多い圃場は、ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月上～中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では3.2頭（平成9.7頭）、県北部および中部の普通期栽培では9.3頭（平成15.2頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平成4.9頭）、上富田町0頭（平成0.9頭）、那智勝浦町5頭（平成7.0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 縞葉枯病の発生が多い圃場は、ヒメトビウンカの防除を行う。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月上旬～中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では2.8頭（平成5.5頭）、県北部および中部の普通期栽培では1.5頭（平成1.5頭）であった。
- ② 予察灯による7月1～20日の誘殺数は、紀の川市5頭（平成1.4頭）、上富田町10頭（平成31.1頭）、那智勝浦町76頭（平成260.4頭）であった。

6. セジロウンカ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠

- ① 7月上旬～中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では12.3頭（平成57.5頭）、県北部および中部の普通期栽培では6.9頭（平成40.9頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市5頭（平成110.1頭）、上富田町11頭（平成95.5頭）、那智勝浦町38頭（平成87.2頭）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期に株あたり成幼虫10頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

7. トビイロウンカ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠

- ① 7月上旬～中旬の25株あたり生息密度は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0頭（平成0.1頭）、県北部および中部の普通期栽培では0頭（平成0.3頭）であった。
- ② 予察灯による6月1日～7月20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平成0.7頭）、上富田町3頭（平成1.0頭）、那智勝浦町13頭（平成2.2頭）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫5頭以上の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

8. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 7月上旬～中旬の25株あたりツトム数は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では0（平成0.1）、県北部および中部の普通期栽培では0（平成0.1）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月上旬の発生に注意し、若齢幼虫の防除に重点を置く。

9. コブノメイガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 7月上旬～中旬の25株あたり上位2葉の被害は、県南部（田辺市以南）の早期栽培では5.3葉（平成5.7葉）、県北部および中部の普通期栽培では0.1葉（平成0.4葉）であった。
- ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による6月1日～7月20日の誘殺数は2頭（平成1.4頭）であった。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代の発蛾最盛期は7月下旬頃と思われる。
- ② 防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル等）の場合は第2世代幼虫発生時期（第1世代の発蛾

最盛期の7日後)である。

- ③ 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

10. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培の本田における7月中旬の捕虫網20回振りによる捕獲虫数は1.7頭(平年5.8頭)であった。
- ② 予察灯による7月1~20日の誘殺数は、紀の川市101頭(過去3年の平均114.3頭)、上富田町110頭(過去8年の平均17.1頭)、那智勝浦町40頭(過去8年の平均80.6頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。
- ② イネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までにはほ場周辺を除草する。
- ③ 出穂後、本田内でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシなどの飛来を認めたら、乳熟期(出穂10日後)から糊熟期(出穂20日後)に薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期(出穂3日後)に薬剤散布する。

II. 野 菜

<トマト・ミニトマト>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は0%(平年10%)であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。
- ② 露地栽培では、降雨前の予防散布に努める。降雨前に散布できなかった場合は降雨後に早急に防除する。

2. 黄化葉巻病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培ミニトマトにおける7月下旬の発生ほ場率は44%(過去6年の平均50%)であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
- ② 施設栽培では育苗ほ、本ほとも施設開口部へ目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、媒介虫であるタバココナジラミの侵入を防止する。
- ③ 施設栽培では定期的な薬剤散布に加え定植期の粒剤処理により、感染適期である育苗期から本ほ初期のタバココナジラミ防除を徹底する。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の生息葉率は、ワタアブラムシ3.1%（平成0.5%）、モモアカアブラムシ0%（平成0.0%）であった。
- ② 黄色水盤（紀の川市）への7月1～20日までの飛来数は19頭（平成12.0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率および生息葉率は、カンザワハダニでそれぞれ22%（平成27%）、7.1%（平成8.3%）であった。ナミハダニの発生は認められなかった（平成：発生ほ場率13%、生息葉率3.4%）。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率は22%（平成26%）、生息葉率は5.3%（平成5.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ナスでは、収穫果実の選別時に被害を認めたら防除を始める。
- ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
- ③ 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ④ 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源とならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率2%、生息葉率0.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培ナスにおける7月下旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率5%、生息葉率0.3%）であった。
- ② フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、和歌山市41頭（過去8年の平均103.7頭）、紀の川市28頭（平成42.8頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。

- ② 抑制栽培エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

6. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① フェロモントラップによる7月1～20日の誘殺数は、紀の川市63頭（平年16.2頭）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ハスモンヨトウに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生園率は17%（平年26%）、発病度は0.3（平年1.2）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 秋雨時期における後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。

② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

③ 過乾燥等で樹勢が低下すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の春葉病斑の発生園率は38%（平年27%）、発病度は0.4（平年0.3）であった。

② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防風対策に努め、台風の接近等で強風雨が予想される場合には、事前に薬剤散布を行う。

② 夏秋梢の病斑は翌春の主要な伝染源になるので剪除に努める。幼木、高接樹ではミカンハモグリガの防除も徹底する。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の発生園率は3%（平年31%）、発生葉率は0.5%（平年7.3%）、100葉あたり雌成虫数は0.7頭（平年25.4頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤を年間に2回以上使用しない。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 第2世代2齢幼虫最盛期 8月15～20日（並）

発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）での第1世代成虫の初発時期は平年並であった。
- ② 予察ほ場、各地域とも第1世代幼虫の発生量は平年並であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生園では8月中旬に、散布むらがなく葉裏までかかるように、十分量の薬液を丁寧に散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における7月中旬の果実の被害園率は6%（平年21%）、発生園率は2%（平年4%）であった。
- ② 予察ほ場（無防除、由良町）における黄色粘着トラップによる7月中旬の誘殺数は19頭（平年205頭）であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 地域での発生活長調査の結果により、適期防除に努める。
- ② 発生園およびイヌマキやサンゴジュの隣接園では防除を徹底する。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場、各地域とも成虫の初発は平年並であり、6～7月の発生量も平年並であった。
- ② 発生源となる放任園や管理不良園が増加している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 成虫の捕殺に努め、放任園周辺など発生の多い園では、産卵防止および食入幼虫対象の防除として薬液を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発病果率は「富有」0%（平年0.1%）、「平核無」・「刀根早生」0%（平年0%）であった。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
- ② 台風が接近する場合は事前に薬剤を散布する。散布できなかった園は台風通過後速やかに散布する。
- ③ 密植園や風通しの悪い場所は発病しやすいので、園内の通風・採光をはかり、薬液をかかりやすくする。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における7月中旬の発生園率は「富有」65%（平年67%）、「平核無」・「刀根早生」12%（平年28%）であった。

- ② 県北部における7月中旬の発病葉率は「富有」5.5%（平年7.5%）、
「平核無」・「刀根早生」0.2%（平年1.2%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に薬液を散布する。
 - ② 一般に盛夏期の発病は一時休止するが、山間部や風通しの悪い園地は発病を繰り返しやすいので、これらの園地では秋雨前の予防散布に努める。

3. 円星落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における前年10月の「富有」における発生園率は59%（平年42%）、発病葉率は4.6%（平年5.6%）であった。
 - ② 梅雨入りは遅く、5～6月の日照時間は多かった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。
 - ② 子のう胞子の飛散が続く8月上旬まで防除が必要である。

4. 角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における前年10月の「富有」における発生園率は29%（平年71%）、発病葉率は1.5%（平年14.6%）であった。
 - ② 梅雨入りは遅く、5～6月の日照時間は多かった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理や水分管理を心がけ樹勢維持に努める。
 - ② 本病は7月頃から発病し二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

5. フジコナカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における7月中旬の発生園率は、「富有」29%（平年60%）、
「平核無」・「刀根早生」0%（平年22%）であった。
 - ② 県北部における7月中旬の寄生果率は、「富有」1.1%（平年6.4%）、
「平核無」・「刀根早生」0%（平年1.1%）であった。
 - ③ 8月の気象予報による。
- (3) 防除上注意すべき諸点
 - ① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における近年の第2世代ふ化幼虫の初発は7月21～27日頃であり、次回の防除適期は8月上旬頃と予想される。
 - ② 枝葉の混み合いをなくし、薬液が果実に十分かかるよう丁寧に散布する。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察灯による7月中旬のチャバネアオカメムシ成虫の誘殺数は、紀の川市粉河で53頭（平年234頭）、有田川町奥で23頭（過去5年の平均553頭）、みなべ町東本庄で54頭（過去9年の平均435頭）であった。
 - ② 予察灯による7月中旬のツヤアオカメムシ成虫の誘殺数は、紀の川市粉河で0頭（平年64頭）、有田川町奥で12頭（過去5年の平均91頭）、みな

べ町東本庄で29頭（過去9年の平均162頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。
- ② 園内での果樹カメムシ類の発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ③ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所>

[https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780